

# 愛知大学における孫文

東亜同文書院大学記念センター研究員 武井 義和

**司会** 皆さん、こんにちは。本日は午前と午後の二部制という形で講演会を開催します。まず午前の方は、東亜同文書院大学記念センターの方で研究を一生懸命されているお二方にお話をお願いしたいということでございます。まず最初は武井義和さん。武井さんは、愛知大学に展示もごさいますが、山田兄弟、そのうち純三郎という方が孫文の実質的な秘書をやっておられました。その息子さんの順造さん、この方も書院の卒業生ですけど、お父さんが集めた資料をベースに孫文博物館を作りたいと思いながら身体を悪くされたということもありまして、生資料を一括ごそつと寄贈されました。そういうわけで、日本の中で孫文の生資料は本学が一番多く持っております。そのへんを踏まえて、今日は「愛知大学における孫文」というタイトルでお話して頂きます。短い時間ではありますが、ご清聴頂けたら有難いと思います。それでは、早速宜しくお願いします。

**武井** それでは皆様、こんにちは。ただ今ご紹介頂きました武井でございます。早速、中国の革命家、孫文にまつわる資料をご紹介します。

孫文は1911(明治44)年に「ラストエンペラー」で有名な清朝を打倒した辛亥革命を指導したことで有名です。2年前の2011年は辛亥革命100周年にあたりまして、日本国内や中国、台湾などで国際シンポジウム、研究会など多くの催しが行なわれました。また、ジャッキー・チェン監督、出演の映画「1911」が公開上映されたことも、記憶に新しいところかと思えます。

しかし、孫文は辛亥革命を成功させたのですけれども、中国の政情はその後も安定しませんでした。そのため彼は亡くなるまで革命活動に奔走せざるを得なかったわけです。

そうした中で、実は300名とも1,000名とも数えられる日本人が孫文と関わりを持っていました。その多くは打算、ないしは日本国家の利益拡大のためだったといわれているのですけれども、中には真摯な気持ちで孫文支援に尽力した人々もいました。その中の中心的存在といえるのが、山田良政・純三郎兄弟です。良政が兄、純三郎が弟に当たります。

この兄弟の生涯については、お手元のプリントの裏側に簡単な略歴を載せておきました。詳しくはそちらをご覧頂きたいのですけれども、明治の初めに元津軽藩士の子として青森県の弘前に生まれました。そして明治の中頃から、兄弟そろって孫文支援を行なっていた人々です。孫文が自ら著した本の中で、中国の革命事業に尽力する日本人の一人として名前が挙げられています。

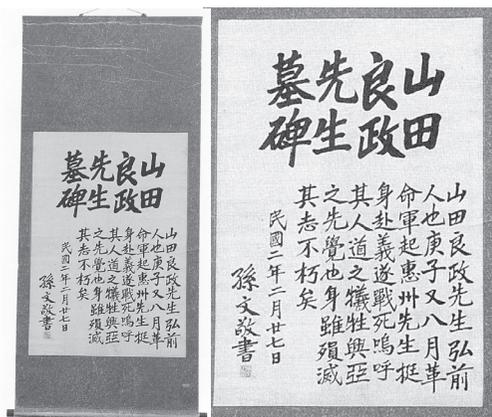
そうした関係で、弟の純三郎の手元には多くの革命資料が残されていましたが、四男の順造さんという方が、亡くなる直前に父・純三郎から受け継いだ全ての資料を愛知大学に寄贈するという意思表示をされました。これによりまして、1991年10月、平成3年ですけれども、愛知大学に全ての資料が山田家から寄贈されました。その後、学内で資料整理が進められまして、1998年5月にその中のごく一部の資料を一般公開して、今日に至っております。今からその中のさらに一部の資料ですけれども、皆様にご紹介します。

「愛知大学記念館」という場所で山田家資料、そして愛知大学の前身だった東亜同文書院大学に関する資料を展示しております。東亜同文書院大学記念センターが入っている建物でもあります。展示室の内部は第一展示室が東亜同文書院大学に関する部屋、第二展示室と第三展示室が孫文・山田兄弟を紹介する部屋になっております。色んな

資料を展示しております。

山田良政は今から110年ほど前に孫文と出会いまして、その瞬間から支援者になることを決意したといわれています。その翌年、孫文が広東省の惠州、香港に近い場所ですが、そこで清朝打倒のための最初の武装蜂起を起こします。これが1900年秋です。当時、良政は日中友好を目指して南京に造られた南京同文書院という学校の教員をしていました。ところが、孫文が武装蜂起を起こすというので、学校を辞職しまして孫文の元に駆けつけます。そして惠州起義に参加するんですね。ですが惠州起義は失敗しまして、良政は清朝の兵士に捕らえられ処刑されました。享年33歳でした。

こちらは後に辛亥革命を成功させた孫文が、革命翌年の1913(大正2)年に日本を公式訪問した孫文が書いた、山田良政への追悼文です。向かって右側が、追悼文の部分拡大したもので、左側が資料の実物です。掛け軸状になっておりますが、今回、展示室で展示されておりますので、ご覧頂きたいと思っております。本文は良政を讃える文章が書かれております。



こうした良政の遺志を受け継ぐ形で、純三郎が孫文のサポート役を務めていくことになります。純三郎も南京同文書院に関わっておりまして、良政が教員だったのに対しまして学生として学んでいました。南京同文書院は1900年、創立2、3ヵ月後には上海に移転するのですが、純三郎も上海に移転します。そして南京同文書院は翌年に上海で東亜同文書院として再出発するのですが、そこで事務員兼助教授として務めました。1904

年に日露戦争が起こりますと従軍し、戦争後、南満州鉄道に入社しました。その後、革命に関わっていくことになります。

1911年12月、辛亥革命が成功しつつある時期に欧米を訪問していた孫文が中国に帰ってきましたが、純三郎が上海から香港まで出迎えました。この頃から純三郎は革命の表舞台に出てきて、孫文が亡くなるまでの10数年間、日本人でありながら秘書役として孫文を支え続けるという人生を歩みました。

これが孫文を出迎えた多くの同志たちと船の上で写された集合写真です。孫文と純三郎が2人で並んで写っている写真もありますが、これは出迎えた人たち全員が船の甲板に集まっています。山田純三郎は前列の向かって右から2人目です。4人目が孫文ですね。孫文の斜め上にいる和服を着た、ひときわ目立つ人物が宮崎滔天です。九州熊本出身です。

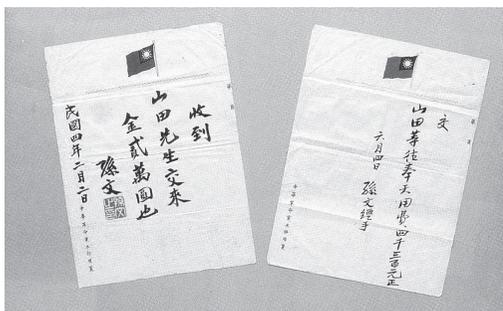


こちらが黄興という人物で、辛亥革命の時に軍事面で孫文を支えた人物です。



映画「1911」でジャッキー・チェンが演じた人物です。辛亥革命の後は意見対立がありまして、次第に疎遠となっていくのですけれども、辛亥革命では軍事面で孫文を支えるというような重要な役割を果たしました。その黄興が純三郎に書いた「履忠蹈信」という書も山田家に残されていました。

こちらが革命資金に関する書類なのですが、辛亥革命後も孫文は革命活動に奔走しました。純三郎も革命活動を支援していくのですけれども、そうした中でこのような書類が残されました。向かって左が受領書ですね。「金 2 万円を頂きました」と書いてあります。右側が革命活動で出掛ける山田に対する資金の支払書です。



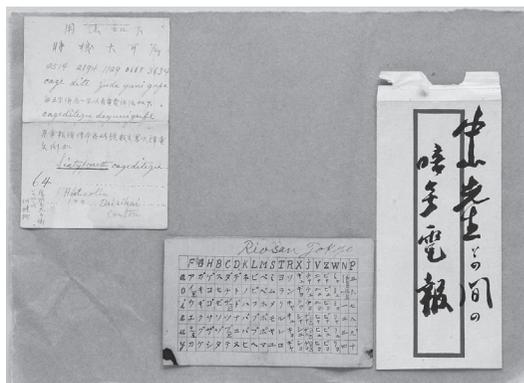
ですが、革命を四六時中やっているわけにもいきませんで、たまには息抜きも必要です。

これは満洲の方へ革命工作で出掛ける前に、京都の嵐山で遊んでいる写真なのですが、通せんぼをしている純三郎の前後2名が中国の革命家です。こうしたユニークな、人間味溢れる写真も残されています。



これが暗号表です。展示会場でパネル形式で展示しております。封筒には「暗号電報」と書いてありますが、下の方はアルファベットとカタカナでまとめられた簡単な乱数表、上の方は別の暗号表の使用方法を中国語と乱数字で示したものです。孫

文と山田純三郎の密接な間柄を示す貴重な資料かと思います。



しかし、孫文も病には勝てず、1925(大正 14)年に北京で亡くなりました。その4年後、南京の山の上に、「中山陵」という非常に大きな中国式の建物のような孫文の墓が造られました。「中山」というのは孫文の別名なのですが、北京から運ばれた棺が多くの人によって運ばれ、石段を登っている様子を写した写真も残っております。この「中山陵」は今もありまして、多くの日本人が訪れる場所としても有名です。

さて、移霊祭には山田純三郎も参拝しておりますが、実は彼以外にも何名かが日本から中山陵に駆けつけて参拝しております。その一人が犬養毅です。犬養は五一五事件で暗殺された首相として有名ですが、実は明治の中頃から孫文の支援者でした。その関係で明治の終わり頃から純三郎とも交流がありました。例えば、犬養が山田に贈ったものとして「怨無怨」という書があります。「じよむえん」と読むのですが、意味は「広い心があれば恨み事がない」という意味なのですが、犬養が中山陵を参拝した時に純三郎と南京で落ち合いまして、その時に純三郎に贈った書です。

こちらは昭和19年3月、上海での日本語専門学校の卒業式の写真です。孫文が亡くなった後、1920年代の終わりに中国は統一されていきますが、純三郎は次第に革命とは疎遠になっていきます。そして1936年上海に日本語専門学校を設立しまして、中国人に日本語を教えるという仕事をやっていくようになりました。学校の正式名称は「上海日本語専修学校」というのですけれども、敗戦時までその校長を務めました。写真を見ますと、2列目、3列

目には中国人学生らしい人たちが写っています。そして最前列が教職員でしょうか、純三郎は最前列の向かって左から4番目に座っています。こうした活動を戦争中は行なっていました。



こちらは「通行证」というタイトルが付いていますが、許可証です。戦後上海に進駐してきた国民政府軍が発給したものです。本文は中国語で書かれているのですが、日本語に簡単に直しますと「山田純三郎は、過去に国父の革命事業に従ったので、通行の自由を認める。集中規定の適用外とする」という意味になります。「国父」とは孫文のことです。「集中規定」とは日本人管理というような意味でして、敗戦当時上海には10万人程の日本人居留民がいました。また、日本軍兵士もいました。敗戦になりますと日本軍の武装解除、そして日本人居留民の強制送還のために進駐してくるのですが、居留民たちは中国側が設定した居住地域に強制的に入れられ、そこから引揚船に乗せられたわけです。ですから、通行の自由、居住の自由というものは敗戦後制限されたのですが、純三郎に対してはそうした制限を設けない、今まで通りの生活を認めるという許可証なんです。ですから、敗戦直後も中国側は山田純三郎を非常に高く評価していたことがうかがえる、非常に貴重な資料です。

山田純三郎は敗戦後3年ほどして引揚げてきて、昭和35年に東京で亡くなるのですが、亡くなくても革命との縁は途切れませんでした。死後16年後の昭和51年には出身地の青森県弘前にある山田家の菩提寺に記念碑が建てられました。台湾政府、そして日本と台湾との友好親善を深める日本側の団体である「日華友好協会」の青森県支部などが関わりました。記念碑の上の方には「永



懐風義」という題辞が篆刻されています。「立派な行いを長く思う」という意味なのですが、蒋介石が自ら揮毫して贈ったものです。

ここで、最近の記念センター、そして山田兄弟の認知度についてちょっとご紹介したいのですが、最近おかげさまで少しずつ、山田兄弟について知られるようになってきたかなと思います。近年は中国や台湾からの修学旅行生も来るようになり、記念センターの展示室をご覧頂いています。また、辛亥革命100周年にあたる2011年の11月にはNHKのBSプレミアムで「孫文」という番組が放映されました。その取材でテレビカメラが2回記念センターに入りましたが、その時に馬場センター長がインタビューを受けられました。こちらは、孫文が山田に贈った書について、カメラの前で馬場センター長が紹介されている様子です。実はこのときに、写真には写っておりませんが私も佃講師とともに控えておりました。そして私は馬場センター長に孫文の書をお渡しする役を演じました。テレビカメラ



の前で何度かリハーサルもして、本番でもカメラの前に立ったのですが、残念ながら私の姿は全部カットされて、ただ左足だけが辛うじて映ってありました。そうした良き思いでもございます。

また、2011年には愛知大学におきまして、記念センター主催で台湾からも先生をお招きした国際シンポジウムを開催しました。あと、宣伝になってしまのですが、今回の展示会場では山田兄弟に関する資料のごく一部を展示しておりますが、ご紹介できなかったものもたくさんございますので、山田兄弟の生涯を浮かび上がらせる主な資料を、ブックレットという形で私の方でまとめさせて頂きました。外に記念センターがこれまで発行してきた図書が閲覧用として並べられておりますが、その中にこのブックレットもあると思います。もし関心がおありの方は、ご覧頂ければと思います。

時間の関係で早口になってしまいましたけれども、山田兄弟についてご紹介させて頂きました。最後に私見を1つ述べさせて頂きますが、ここ最近、特にこの数年間、日中関係は非常にギクシャクしており、難しい状況になってきております。こうした時だからこそ、山田兄弟のような、中国のことを真剣に考えていた日本人がかつていたということを、今一度思い出すことは非常に重要なことなのではないかと考えております。

以上で私の発表を終わらせて頂きます。ご清聴有難うございました。

**司会** どうも有難うございました。短い時間でしたが上手くご紹介頂きました。時間があまりありませんけれども、ご質問がございましたら、どなたかお一人お願いします。宜しいでしょうか。武井さんは展示室の方に今日ずっとおりますので、展示をご覧になりながら結構ですので、ご質問等頂けたら幸いです。では、どうも有難うございました。